

朝を ひらく

人は〈屁〉に対して羞恥を抱く。不覚にも人前で放った〈屁〉の恥ずかしさはたとえようもない。特に夫婦間では、奥深い心理が絡むものである。

先日のこと、私の放屁につられて女房がプーとやってしまった。一瞬のことにお互い顔を見合わせる。羞恥の表情が顔全体に広がる。10代の乙女にもどったような恥じらいが、次の瞬間なんともいえない笑顔に変わった。

それはコトバでは言い表しようのない明るさ。あたかもアマテラスが天の岩戸から出て諸人を闇から光に導いたかのような

許し合う放屁

永田 円了
真国寺住職



温かさ。数秒間の出来事がスロ―モーションのように思い浮かぶ。

黄泉の国へ旅立ったイザナミに会いに行くイザナギ、見るな の禁を破って妻イザナミの醜い姿を見てしまう。正体を見られたイザナミは「あなた見たわね、許さない」と夫イザナギを追いかける。古事記では、見られたくない自分の姿を見た夫を許さない妻。妻の正体を見て逃げる夫が描かれている。

る。

女房にとってオナラは知られたくない闇の部分。それを知ってしまった夫もまた闇をもっている。さあどうする。逃げるのか、それともこの闇と対峙するのか。アインシュタインいわく、自分の闇と対面するとき、その闇から逃げないこと。その闇の中に入って抜けること、それ以外に方法はないと。

この出来事以来、女房が妙に明るくなった。皮むけたのだからか。見せたい部分だけを見せていた自分から、さあ、ありのままの姿を見てよ、に変わったとしたら、オナラに大感謝である。

人間関係の中で放屁を許し合

うことは、お互いが一切の利害損失から自由であり、分け隔てもない間柄であるということ象徴する意味深い行為のように思える。

一休和尚は、花見で思わず放屁し、恥じることなく「あな面白の春べやな」（春方と春屁をかけて）としゃれてみせた。いわば〈屁〉からの解脱であり、超克である。そこには否定も肯定もなく、止揚された自由な〈屁〉が存在するだけ。

女優吉永小百合が小説家の石坂洋次郎と対談したときのこと。「小百合さん、結婚してもうだいぶん経つから、ご主人のオナラ聞いたことあるでしょう」（笑）。これに対する《天下の美女》の答えは「いいえ、主人のは聞いたことはありませんが、私を主人に聞かせてしまったことはありませんよ」（笑）。

止揚された自由存在